

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	長屋 憲慶
論文題目	エジプトにおける初期国家形成期の石器研究
審査要旨	
<p>本論文は、エジプト先史考古学における最重要課題のひとつである、ナイル川下流域において如何にして初期国家が形成されていったかという問題を、当該地域から出土する石器群を詳細に分析することで明らかにしようとする意欲的な研究である。本論文は、以下にあげる9つの章と序章および終章で構成されており、内容は以下の通りである。</p> <p>「序章」では、「エジプトにおける初期国家形成期の石器研究」という題目のもとで、何をどこまで明らかにしていくかについて言及し、論文の構成について紹介している。</p> <p>「第1章:エジプト先王朝時代」では、石器分析の前提となる先王朝時代の社会について、時期区分、年代、自然環境、文化の各分野について概観している。中でも、ナイル川下流域における先史時代の時代区分では、通常、旧石器時代、新石器時代、先王朝時代に分けられるが、本論文で対象とする先王朝時代の枠組みは、研究者間でも一致していない。そのため、本論文で扱う「先王朝時代」を、バダリ文化期を含めた時期と規定している。また、エジプトにおける初期国家形成に関する従来の問題点を集約する形でまとめている。</p> <p>「第2章:先王朝時代の石器研究史」では、石器研究史について石器の分類概念、型式学的研究、技術研究、機能・用途に関する研究のそれぞれの分野を概観している。エジプト先王朝時代における従来の石器研究においても、研究法別にまとめている。</p> <p>「第3章:研究の目的と方法」では、本論文における具体的な研究課題と方法について言及し、研究の目的としては、第一に、実用の石器としての剥片石器、および非実用の石器としての両面加工石器が、それぞれにどのような技術によって製作されていたのか、如何なる技術的あるいは社会的位置づけにおける変化を辿ったのか、という点を明らかにすることであるとする。また、第二に、こうした諸要素を再構築し、初期国家形成期のエジプトの石器の特徴とその変遷を社会的な脈絡の中で総合的に理解することを目指すとしている。</p> <p>「第4章:ヒエラコンポリス遺跡」では、エジプト南部の先王朝時代を代表するヒエラコンポリス遺跡で出土した石器資料の製作技術を詳細に分析することで、当該期の石器製作がどのように変化していったかを製作技術や生産形態から論じている。ヒエラコンポリス遺跡の特徴や最近の調査動向を簡潔に紹介した後に、本論文で対象とするヒエラコンポリス遺跡の5地区を概観し、それらの地区における石器組成について、個別にまとめている。それらの検討から、ヒエラコンポリス遺跡は、ナカダ文化の中でも、機能や階層を異にする実にさまざまな遺構が包含されている遺跡であり、先王朝時代から初期王朝時代へと移行する社会の流れを追尾するための最適な資料を供給する遺跡であるとしている。</p> <p>「第5章 実用の石器(1)石刃剥離技術の発達と展開」では、初期の統一国家成立の直前期に、エジプトで展開した定型的な石刃について、ヒエラコンポリス遺跡出土の資料を用いて、剥離技術の変遷と特徴、技術の起源、石刃の用途などの点から広範に論じている。ナカダ III 期から初期王朝時代の石刃剥離技術は、排他的な石材選択、入念な頭部調整、単設打面石核による長側縁が平行かつ1ないし2本の稜線が走る石刃によって特徴づけられる。こうした技術は先王朝時代から漸次的に変化していった。ヒエラコンポリス遺跡出土の石刃の分析では、剥離方法と剥離物形状に関する多くの点でカナン石刃とは一致せず、両技術には明確な共通性は見られなかった。したがって、ナカダ III 期から広がりを見せる石刃剥離技術は、レヴァント地方由来の急速な技術転換によって成立したものではなく、エジプト内部で徐々に発達した可能性が高いと結論付けた。</p> <p>「第6章:実用の石器(2)モノづくりの道具としてのドリル」では、エジプト先王朝時代の穿孔技術について、実験的手法による検証を試みている。その内容として、フリント製小型ドリルを用いて、種々の材質への穿孔が可能であるかどうか、可能であれば如何なる方法が想定しうるのかを検証・実験し、さらに穿孔作業によって生</p>	

じる様々な形状変化を観察し、その類型化と成因の考察を図った。この実験は詳細を極めており、その結果、フリント製ドリルと弓錐とを用いた穿孔は、先王朝時代に工芸品の素材として利用された基本的材質に対して有効であること、使用後のドリルの顕微鏡観察により、加工物の硬さや作業段階、操作法に規定される固有の剥離痕がドリル腹面に形成されることなど、興味深い知見を提示している。

「第7章:非実用の石器(1)両面加工石器の製作技術水準」では、先王朝時代のヒエラコンポリス遺跡における両面加工石器の製作方法と技術水準について、2段階の製作工程に着目して分析をおこない、以下の2点を指摘している。第一の分析では、工程②(成形工程)の分析からは、遺構の性格を問わず存在する2系統の剥離方法が確認された。第二の分析では、工程③(整形工程)と完成品の分析によって、遺構の総体的な技術水準が階層に比例するものの、個別には階層の低い遺構においても極めて高い技術水準によって石器が製作されていることを明らかにした。

こうしたことから、精巧な石器を製作するための技術自体は、上層階級のみで専有されていたわけではなく、製作や技術にかかわる知識が、階層を越えた範囲で広く共有されていたことを指摘している。

「第8章:非実用の石器(2)エリートのための石器製作」では、ヒエラコンポリス遺跡のエリート墓地に副葬された両面加工石器が、他と比べて何が特別であるのかを検討した。その結果、エリート墓地出土の石器には、特定の石材、技法、製品の組み合わせから成る3つの類型の存在が認められた。この組み合わせの相違は、石器製作において人為的な統制が働いた結果であると推定した。そして、この統制によって、石器に共同体の中で固有かつ共通の価値が付与され、エリート層の威信を保証する装置として働いたと考えた。

「第9章 初期国家形成期の石器文化」では、ナカダⅡ期半ば、すなわちナカダ文化の拡張における石器の変化について、専門化の視点から論じている。また、この時期に起きた石材利用の画一化が画期として設定でき、この石材を利用して剥片石器・両面加工石器ともに製作技術と生産形態に変化が生じることを示している。また、専門化の視点からは、石器の価値基準の変化が、石器製作を担う工房の組織化・複雑化・分業化をより加速させる結果になったことを指摘している。

「終章」では、ヒエラコンポリス遺跡から出土した石器の分析を実施した第5章、第6章、第7章、第8章、第9章を総合的にまとめている。初期国家形成期のエジプトにおける石器は、文化の領域拡大というナカダⅡ期後半からの社会状況に促されて、その製作技術と生産形態を合理的に変化させてきたとしている。

以上、本論文は、エジプト初期国家形成期の社会を、石器製作とその使用の観点から考察したものであり、従来の研究の多くが当該時期の土器を中心とするものであったのに対して、石器研究という新たな視点を提供している。ヒエラコンポリス遺跡では、エリート墓地に副葬された動物形石器が消失し、波状剥取ナイフへと替る時期が、ナカダ文化が北へ拡大する時期(ナカダⅡ期半ば:前3650年頃)と一致し、また剥片石器である石刃の定型化の時期とも合致していることを指摘し、ナカダⅡ期半ばに起きた石器製作技術の変化が、石器製作を担う工房の組織化・分業化をより加速させる結果となり、ナカダⅢ期後半の第一王朝開始の時期へと移行していくと指摘している。第6章で展開された穿孔実験および使用痕分析などの手法は、今後研究の進展が期待される分野である。本論文では、上エジプトのヒエラコンポリス遺跡出土の石器分析が中心であり、ナイル・デルタなど北部の遺跡における石器群の分析が不十分であった点、また、エジプトの初期国家形成期の石器製作における専門化の具体的なモデルの提示など、解明すべき問題点は多く残されているが、従来の研究にはない、エジプト初期国家形成期の優れた石器研究となっている。よって、ここに本論文は、課程による博士(文学)の学位に十分値するものと判断する。

公開審査会開催日	2015年 5月 15日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	専門分野	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		エジプト考古学	近藤 二郎
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		先史考古学	高橋 龍三郎
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		旧石器考古学	長崎 潤一

